

赤い糸

幸運

春日信彦

## 恋人未満

美緒はF大学に進学できなかったが、安部医科大学医学部看護学科に入学できた。シングルマザーになりたかった美緒にとっては幸運だったと今では喜んでいて。看護学科を受験するきっかけになったのは、志摩総合病院への父親の入院だった。美緒が高校3年生の時、脳梗塞（のうこうそく）で倒れた父親は、植物人間として命を維持していたが、なぜか、突然の心不全ということで急死した。主治医は、死因について何か気まずそうに言い訳をしたが、美緒には主治医が言っていることが何が何だかさっぱりわからなかった。その時、申し訳なきような顔で、将来看護師になって当病院で働いてみないかと美緒に勧めた。そのこともあり、美緒は、合格できるとは思っていなかったが、チャレンジする気持ちで看護学科を受験した。美緒の自己採点では生物学がほとんどできてなかったため、不合格と思っていたが、なぜか、合格通知を手にした。

美緒は志摩総合病院の北側にある女性専用マンションに住んでいたが、そこから200メートルほど西側にある安部医科大学の男子寮には糸島高校の同級生だった鳥羽が住んでいた。男子の話し相手がない美緒は、鳥羽を呼びつけては相談相手にしていた。10月6日（土）午後3時すぎ、医科大2Fのティールームで二人は落ち合った。いつもの窓際のテーブルに鳥羽が着くと美緒はスキップしながら自販機に向かった。ミルクティーのボタンを押してガチャンガチャンとホットミルクティーを二つ落として取り出すと両手にもって巨乳を揺らしながらテーブルに戻ってきた。美緒は、「はい」といってミルクティーを差し出し、鳥羽の正面に腰掛けニコッと笑顔を作った。いつものシングルマザーの相談だと思い、内心、いやな気分になったが、サンキューといって350ミリリットルのペットボトルを手を取った。

美緒は目を凝らして鳥羽の口元を見つめていた。鳥羽は眼球をギョロギョロっと動かし美緒の異様な笑顔を見つめた。鳥羽はあまりにも大人びている美緒が苦手だった。素直な気持ちをダイレクトに言っただけの性格には感心していたが、女子にしてはあまりにも歯に衣を着せぬ物言いに若干キモかった。最近では、彼女でもないのにあたかも彼女のごとくなれなれしく話しかけて来る。一般の女子と比較するとあまりにも恥じらいがなく、多少不作法。でも、キュートな笑顔を見せられるとなぜか、憎めない。テーブルに二人で腰掛けているとデートかと同僚に冷やかされ、誤解を解くのにいつも冷や汗をかいていた。でも、美緒は、一向に他人の目を気にしない。

。

美緒は舌先でペットボトルの飲み口をペロペロ舐めていた。ちらっと鳥羽に目をやると話し始めた。「鳥羽ク〜ン。どう思う、シングルマザー。悪いことかな〜。でも、結婚できる相手じゃないし。鳥羽君。どう思う？」ほんの少し顔を引きつらせた鳥羽は、またか、と思いつつ返事した。「僕にそんなことを聞かれても、わかんないといってるじゃないか。俺は、結婚もしてないし、いまだ、彼女もできないブサイクな男なんだから。そんな、難しいことは、ゆう子先輩に相談すればいいじゃないか。とにかく、俺に相談してもムダ。なんど言えばわかるんだ。たがいにしてくれよ。頼むから」鳥羽の顔は困り果てたしかめっ面になっていた。

全く意に介していない美緒は、平然と話を続けた。「もちよ、ゆう子先輩には、相談するわよ。でも、男子の意見も聞きたいの。なんでもいいから、思っていることを話してよ。男子の友達は、鳥羽君しかいないんだから。それとも、美緒とは話をしたくないっていうの？それって、ちょっと冷たくない」また、同じセリフがまた始まったと心の中で嫌味を言ったが、美緒のかわいい笑顔を見せられると何も言えなくなった。「いやというんじゃないで、俺の意見なんて、参考にならないって言ってるんだ。シングルマザーってのは、結婚もせず、子供を育てるんだろ。そんなこと俺には、考えられないよ」鳥羽は、両手の指先で頭をガシガシとかきむしった。

美緒はミルクティーをチュチュとすすり、舌先で飲み口をペロペロ舐めた。美緒は、けだるそうなため息をついて話し始めた。「母親一人で子育てするのって、大変よね。でも、どうしても結婚できなければ、一人で育てなければならぬわけでしょ。子供にとって、悪いことかな〜」鳥羽は、さっさと逃げ出したかったが、美緒を怒らせるわけにはいかなかった。というのも、ゆう子の私生活を時々話してくれるからだった。ゆう子の家に下宿していた美緒は、ゆう子のショーツの色やブラのサイズまで知っていた。お風呂も一緒に入ったことがあると聞かされていた鳥羽は、もっと、ゆう子の私生活を聞きたいと思い美緒には頭が上がりなかった。

とにかく美緒を怒らせないように適当なことを話し始めた。「俺は、男手一つで育てられたから、やっぱ、両親がいたほうが良いと思う。母親がいなくてさみしかったし、母親がいる友達がうらやましかった。いつも言うけど、結婚できないような相手と付き合うのは、やめたほうがいいんじゃないか？それって、不倫なんだろう。俺は、そんなことはやめて、結婚できる相手と付き合って、結婚すればいいと思う。美緒はかわいいし、きっとイケメンと結婚できると思うよ。不倫は、よくないよ」美緒は、なんども不倫はよくないと鳥羽からアドバイスを受けていた。でも、相手はまだ結婚をしていなかった。だから、不倫じゃないように思っていた。

美緒は、相手の今の立場を話してみることにした。「不倫か～～。不倫はよくないよね。なんというか、相手というのは、彼女はいるみたいなんだけど、まだ結婚してないの。もうしばらくしたら、結婚するみたいなんだけど。だから、結婚はしなくてもいいから、子供を産みたいって、お願いしたの。でも、それはよくない、って断られた。でも、どうしても彼の子供を産みたいのよ。どうすればいい？鳥羽ク～～ン」不倫ではないが、結婚はしなくていいから子供を産みたいと一方的に言って、近々結婚する相手を困らせていると聞き取れた。それでは、ますます、美緒の考えがわからなくなった。美緒は、少し、いや、かなり、頭がおかしいのではないかと思えてきた。いったい、結婚できないような相手とはどんな男だろうと興味がわいてきた。

鳥羽は、しばらく美緒のHカップの巨乳を見つめていた。理解できない美緒の話に何と答えていか戸惑い質問した。「いつている意味がよくわかんないんだけど、相手の男性には、彼女がいて、同時に、美緒と付き合っているんだな。それって、二股だよな。当然、美緒との結婚は望まない。それなのに、その男性の子供を産みたいって、美緒が一方的に言っているのか？」美緒は、ちょっと違うところもあったが、鳥羽が理解してくれたと思い笑顔で大きくうなずき返事した。「そうなの。さすが鳥羽君。わかってるじゃない。問題は、どうすれば、彼がウンと言ってくれるかなの。どうすればいい？」やはり美緒の頭はおかしいと思った。どんなにセックスが好きな男でも結婚する気がない女性に子供を産ませない。それどころか、万が一妊娠したら、中絶を迫るものだ。美緒は、こんなこともわからないのかとあきれてしまった。

美緒は大人びているようだが、ちょっと男性の心理を知らなすぎるように思えた。能天気な美緒にそのことを話すことにした。「俺に聞かれても、わからないけど、男性というものは、結婚する気もない女性を妊娠させることはないと思う。はっきり言って、男性はセックスフレンドは歓迎するけど、妊娠させるセックスはしないものだよ。まあ、男性とはこんなものだ。できれば、あきらめたほうがいいと思うよ。そっけない言い方だけど」美緒の表情は全く変わらなかった。ミルクティーをチュチュとすすりと窓のから見える青空をぼんやりと見つめていた。ヒョイと振り向いた美緒は、ニコツと笑顔を作った。「そうなのよ。でも、男って、誘惑に弱いよね。いい誘惑の方法はないかしら？鳥羽君も誘惑に弱いでしょ。いい方法はない？」

美緒が変なのか、女子とはこんなものなのか、さっぱりわからなくなったが、美緒をここまで虜にする男性がうらやましくなってきた。いったい、どんな魅力を持っているのか聞いてみたくなった。「俺に誘惑の方法を聞くのは、お門違いだ。そういう方法は、女遊びをやってるイケメンにでも聞いたほうがいい。俺は、誘惑されたことが一度もないし。ところで、その彼氏って、セックスフレンドなのか？その男に興味あるな〜」目を大きく見開いた美緒は、話が盛り上がりウキウキし始めた。「え、鳥羽君、彼に興味あるの？やっぱ、鳥羽君も男ね。彼って、渋い中年なの。職業は言えないけど、ああいう年上じゃないと感じないのよ。困ったものよね、美緒って」

彼女がいない鳥羽にとっては、なんと返事していいかわからなくなった。蓼食う虫も好き好きだから、男女の恋愛にとやかく言えないと思えたが、中年の渋い男を好きにならなくても、かわいくて巨乳の美緒を好きになる若い男子はたくさんいると思えた。「彼女がいない俺が言うのもなんだけど、いくら渋くてイケメンだったとしても、中年のセックスフレンドはやめたほうがいいんじゃないか？美緒だったら、同年代の男子が飛びついてくると思うよ。年相応な相手だったら、何年か付き合っ、ゴールインってことになるんじゃないか」美緒は、大きくため息をつき、腕を組んで巨乳を持ち上げた。「若い男子か。なんというか、感じないのよ。40歳前後が一番感じるのよね〜。ア〜ア〜」

美緒の恋愛話を聞かされているといつも頭痛が起き始めるのだった。まだ、数学の超難問を苦しみながら解いているほうがまだましだった。中年の彼氏だの、感じないだの、全く鳥羽には無縁の言葉だった。美緒の言葉を処理しようとするとう頭がショートしそうになった。「恋愛の話は苦手なんだ。今言えることは、これからもその中年と付き合いたいんだったら、子供の話はしないことだ。その彼氏の目的は、美緒のカラダなんだから。そのくらいはわかるだろ」悲壮感を顔に表した美緒は、つぶやいた。「彼って、近々、結婚するじゃない。結婚したら、もう、会えないっていうの。美緒は会いたいけど、不倫の関係にはなりたくないし、彼を困らせたくないし、だから、子供だけはと思うの。どうすればいい、鳥羽ク〜ン」

鳥羽の頭は錯乱し始めていた。これ以上相談されても、答えようがなかった。冷たいようだが、別れることを勧めることにした。「あくまでも俺の意見だ。悪く思わないでくれ。俺は、きっぱりと、別れたほうが、美緒の将来のためにいいと思う。新しい彼氏を作れば、過去を忘れることができるかも。どうだろう」アドバイスを聞く前から、美緒は常識的なアドバイスに従うつもりはなかった。ただ、他人の意見を聞いて自分を慰めたいにすぎなかった。「新しい彼氏か？美緒を虜にする彼氏って、身近にいるの？いないような？」鳥羽は即座に返答した。「ほら、天神（てんじん）、歩いていたら、よくナンパされるって、言ってたじゃないか。すぐに、彼氏、できるって。美緒は、かわいいんだから。ちょっと、中年にこだわりすぎてるんだよ。同年代の男子と付き合ってみなよ。意外とうまくいくかも？」

ハ〜とため息をついた美緒は、巨乳をテーブルに乗せるようにして左手で頬杖をついた。ヒョイと顔を持ちあげた美緒は、鳥羽を見つめた。「そう、鳥羽君って、ゆう子先輩以外に好きになった女子っていないの？鳥羽君こそ、ゆう子先輩につきまとっているんじゃない。迷惑がっていると思うよ」鳥羽は、ゆう子先輩が迷惑がっていると聞かされ青ざめてしまった。美緒の難解な恋愛の相談に乗ってあげたことに対して、感謝の言葉を期待していた。にもかかわらず、真逆の地獄に突き落とすような言葉を浴びせるとは、極悪非道のこん畜生と思った。目を吊り上げた鳥羽は、反論した。「まさか？迷惑がってるなんて。僕は、ストーカーじゃない。デートに誘ったこともないし、メールを送ったこともない。盗撮したこともない。僕は、潔白だ。僕は、ゆう子先輩の一ファンにすぎない。美緒の誤解だ」

今にもかみつきそうな鳥羽に、びっくりして巨乳をブルンブルンと振るわせた。鳥羽が美緒の恋愛感情を不思議がるように美緒も鳥羽のゆう子に対する気持ちが不思議でならなかった。「そう、怒らないでよ。でも、いつも、ゆう子先輩のことを聞くじゃない。ようは、ゆう子先輩のことを好きなんですよ。一度、コクってみたら。意外な展開が待ってるかも。鳥羽君こそ、勇気を出しなさいよ」ゆう子先輩のことについて美緒に聞きすぎたと後悔した。やはり、ゆう子先輩のことは安田先輩だけに話すべきだったとつくづく思った。ゆう子先輩について話し始めれば、美緒にやり込められるのは目に見えていた。とにかく、話を切り上げて逃げる準備に取り掛かった。「いや、ゆう子先輩のことは、いいんだ。ファンとして、応援することにしてるんだから。美緒の話は、もう終わりか？」

逃げ腰になった鳥羽を見て、身を乗り出して即座に返事した。「まだよ。逃げなくてもいいじゃない。まだ、話したいことがあるんだから。聞いてよ、お願い。鳥羽ク〜〜ン」鳥羽は、また、いつものお願いかと嫌気がさしたが、しぶしぶ浮かした腰を元に戻した。「頼むから、手短かに頼むよ。なんども言うように、俺には恋愛の話はムリ。そうだ、安田先輩に、相談してみては？安田先輩は、恋愛哲学については、相当なものだ。俺も、時々、ご指南いただいてるんだ。まあ、そういうことで」鳥羽は、立ち上がろうとしたが、美緒は間髪入れず返事した。「ちょっと、まだってば〜〜。逃げなくてもいいじゃない。もう少し、聞いてよ。お願い、鳥羽ク〜〜ン」

もはやスッポンの化け物に思えてきた。観念した鳥羽は、もう少し付き合っただけでやることにした。「何だよ。さっき言ったじゃないか。別れたほうがいいって。これが、俺の結論だ。もういいだろ、この辺で」美緒は、意味の分からない笑顔を作って返事した。「そうね、新しい彼氏でしょ。頑張ってみようかな〜〜。鳥羽君って、いま彼女いないの？ゆう子先輩以外に。もしかして、医大生に、好きな人がいたりして」全く訳の分からないことを言うものだとあきれたが、きっぱりと返事した。「いないよ。さっきから言ってるじゃないか。彼女はいないって。俺は、ゆう子先輩のファンでいいんだ。彼女は、いないんだ」目を丸くした美緒は、追い打ちをかけた。「え、彼女は、いないの。一生、デートもしなければ、恋愛も、結婚もしないってこと。信じらんない〜〜い。マジ〜〜」

やはり、一気に逃げ出せばよかったと後悔した。美緒は、いったん、追求し始めるととことん追い詰めるたちだった。これ以上話を続けていけば、変態扱いされそうに思えた。「そう、追い詰めなくてもいいじゃないか。今のところだよ。運が良ければ、将来、彼女ができるかもしれないけど。そんなところだ。もう行くけど」美緒は即座に立ち上がり、鳥羽の右肩を抑え込んだ。「何よ。別に逃げることはないでしょ。もうちょっと、付き合ってよ。そう、今は、いないけど、彼女が欲しいってことね。誰か、いい人いないかな～～。ところで、どんなタイプがいいの。顔は？スタイルは？」厄介なことになったと心でつぶやいたが、だんだんやけくそになってきた。「別に、顔とかスタイルとかは気にしない。気が合えば、それでいいよ。今まで、モテたためしがないから、彼女は、夢でいいよ」

美緒は腕組み押しして巨乳をグイッと持ち上げた。何か考えているような表情でじっと鳥羽を見つめた。「そうだ、同じクラスの子を紹介してあげようか。顔は、いまいちだけど、明るくて、面白い子がいるのよ。どう、一度会って見ない？千里の道も一歩から、っていうじゃない」何か馬鹿にされているようで、目を吊り上げて返事した。「今は、彼女を作る気にはなれないんだ。今、勉強も大変だし、教授のアシスタントもやっている。まあ、気が向いたら、その時は、頼む。とにかく、中年のセックスフレンドは、よくない。そういうこと、そいじゃ」顔をそむけた鳥羽に即座に返事した。「中年のセックスフレンドじゃなければ、いいってこと。そいじゃ、鳥羽君ならいいの？」

さすがに今の言葉には、腰を抜かした。まさか、ここまで言うとなれば、淫乱メギツネに思えてきた。「何を言ってるんだ。俺が言ってるのは、セックスフレンドじゃなくて、同年代の男子と普通の恋愛をしたほうがいいって、言ってるんだ。まったく、俺を持ち出すなよ。意味わかんねえ～」ニコツと笑顔を作った美緒は、ジロツと鳥羽を見つめた。「わかったわよ。そう、怒らないでよ。鳥羽君しか、友達いないんだから。そうね、もう少し、自分ひとりで、いい作戦を考えてみる。鳥羽君って、怒りんぼなんだから」鳥羽が、美緒の言葉を無視して立ち上がろうとすると間髪入れず美緒は問いかけてきた。「ゆう子先輩のこと、聞きたいんでしょ。聞きたいことがあったら、なんでも、聞いていいよ。ホクロがどこにあるか、聞きたくない？いろんなどころにあるのよ」鳥羽は、ゆう子先輩と聞いて気持ちが揺らいだ。またもや、美緒のアリジゴクに落ちていくのかと思うとつくづく自分が情けなくなってしまう。



## 最後のお願い

10月7日（日）午前7時に起床した沢富は、南向きのベランダから雷山を眺望していた。秋晴れのそよ風は心を和ませたが、美緒とのデートを考えると気が重かった。2019年春完成予定の糸島高校前駅近くの新築マンションに今年の5月に引っ越した沢富は、美緒と午前11にマック前原店で落ち合う約束をしていた。午前10時45分に地下パーキングに止めていたブルーのクロスビーに乗り込むと国道202沿いのマックに向かった。いつもは、夕方薄暗くなったころ、人目につかないように志摩総合病院の駐車場で落ち合い、美緒を拾うと沢富のマンションでひっそりとデートしていた。沢富は、人目がつくマックで会いたくなかったが、すでに、過ちを犯してしまった沢富は、指示に従わざるを得なくなっていた。

約束時刻の5分前にマックのカウンターに立ち、窓際の席を見渡したが、美緒の姿はなかった。沢富は、ブラックコーヒーを購入するとかつてよく座っていた窓際の二人用テーブルに着いた。美緒と会うのは最後にしようと思うと話す内容を昨日何時間も考えて、気合を入れてやってきたものの、いざ、これから話すと思うと、怖気づいてきた。左手のブラックをグイッと飲み干すと空になったコップを手にしてカウンターに向かった。空のコップをダッシュボックスに放置込みもう一杯ブラックを小顔の女子店員に注文した。二杯目のブラックを手にしてテーブルに戻った沢富が、窓から国道を走る車をぼんやりと眺めていると、伊都タクシーがゆっくり右折してパーキングに入ってきた。停車したタクシーのドアが開くとレザーミニスカートの美緒の姿が現れた。

カウンター前に立った美緒は、お気に入りの窓際のテーブルに腰掛けている沢富を確認すると笑顔で手を振った。美緒は、オレンジジュースを購入すると自慢するかのようにHカップの巨乳をブルンブルンと揺らしながら笑顔でやってきた。正面に腰掛けた美緒のなんの悩みもないような能天気な表情を見ると沢富の心は解放されるのだったが、今日ばかりは、笑顔に屈しないようにと気を引き締めた。沢富は、自分の過ちを悔いていたが、いざとなれば、結婚という形で責任は取るつもりでいた。美緒は、結婚を拒んでいるが、だからといって、セックスフレンドで終わらせるわけにはいかなかった。全く理解しがたいことだったが、前回のデートの時、子供を産んでシングルマザーになると言い張った。もはや、一大事件に発展していた。

美緒は、笑顔だけを見ていると能天気で優柔不断のように見えるが、そう簡単には気持ちを変えない頑固なところがあった。シングルマザーになることをどのように考えているのか憶測できなかったが、おそらく、子供の育成における苦難については考えていないのではないかと思えた。また、父親の存在意義についても考えてないように思えた。美緒は、物わかりのいい大人のように思えたが、社会人として考えてみると全く無知な子供のように思えた。沢富は、自分の過ちを棚に上げて道徳的説教をする気にはなれなかったが、それかといって、シングルマザーを容認する気にもなれなかった。どうやって美緒の気持ちを誘導しようかと考えめぐねていると美緒と目が合った。

沢富は、ブラックをグイッと一口流し込み口火を切った。「秋晴れだ、ドライブ日和だな。そういえば、マックは、昨年以来だな～。ちょっと、懐かしく感じる」美緒は、窓の外に顔を向け、つぶやいた。これからも、ずっとずっと会えるといいね。でも、やっぱり、別れる時が来るのかな～～。さみしいな～～。サワちゃん、例の彼女と結婚するの？」セックスフレンドを続けていては、二人のためにならないと言われた時から、美緒は、沢富の結婚を直感していた。36歳になる沢富は、ひろ子との結婚を真剣に考えていた。だから、美緒との関係が続けるわけにはいかなかった。沢富は、まだ結婚の話はまとまっていなかったが、この際、来春結婚予定だと嘘を言って美緒を説得することにした。

美緒は、悲観的なことを言っていた割には、表情は明るかった。勇気を振り絞った沢富は、目を吊り上げ話し始めた。「実は、そうなんだ。美緒に黙っていたのは悪かったが、来春、結婚したいと思っている。でも、美緒に対しては、責任を取りたい。だから、美緒が結婚したいというのならば、俺は、美緒を選ぶ。とにかく、シングルマザーは認めない。二人にとって、一番いいのは、二人の結婚じゃないだろうか。今でも、絶対結婚したくないというのなら、俺は、今付き合っている彼女と来春結婚する。美緒、わかってくれないか？」美緒は、聞いているのか聞いていないのか読み取れない表情で窓からぼんやりと青空を見つめていた。

美緒は、言葉で説明できなかつたが、一生結婚をしたくなかつた。シングルマザーになれば、苦勞するのはわかつていた。でも、結婚生活をやっていく自信が全く起きなかつた。できれば、後、一年でいいから沢富とセックスフレンドでいたかつた。今は、安らぎを与えてくれる中年男性とセックスを続けたかつた。心も体もそう願っているのを感じ取っていた。「そう、来春、結婚するの。美緒は、邪魔ってことか。美緒がいて、サワちゃん、困ってるってわけ。そうよね。美緒と関係を持てば、不倫だもんね。そんなの良くない。でもね～～、サワちゃん、あと一年、ダメ。でも、彼女にばれたら、大変なことになるか。サワちゃんの人生をダメにしたくないし」

美緒の気持ちに変化が出てきたと内心ほっとした。うまくいけば、きっぱりと別れられるのではないかと小さな期待を抱きやさしく話し始めた。「二人の将来のためだ。このままセックスフレンドを続けていても幸せはやってこない。美緒は、20歳じゃないか。もっと若いイケメンの男子と恋愛して、幸せをつかんでほしい」美緒は沢富に振り向くと小さくうなずいた。オレンジジュースを一口すすり納得したかのように返事した。「そうね、美緒はまだ20歳だもんね。サワちゃんとは違いすぎるのか。サワちゃんには重荷になるってことね。若い男子の彼氏ね～～。それができれば、一番いいんだろうけど。よし、美緒も勇気を出してアタックするか」

うまく説得できたと思った沢富は、決意を確認することにした。ブラックをグイッと飲み干し美緒を見つめた。「それじゃ、今日できっぱり、別れよう。それでいいんだな」美緒は、即座に返事しなかつた。残りのオレンジジュースををチュチュと飲み干し、自分を納得させるかのように一回大ききうなずき返事した。「わかれることに決めた。若い彼氏を作る。でも、今月までは、今のままでいたい。ダメ？サワちゃん」沢富は、返事に迷った。今日できっぱり別れたい気持ちでいっぱいだったが、今日で別れよう、と言え美緒を怒らせてしまうようないやな予感があった。そうならば、今までの努力が台無しになってしまう。最後のお願いを聞いてやることにして、承諾してやることにした。

沢富は、すっと立ち上がりカウンターに向かった。ブラックを注文し、大きく深呼吸した。ついにここまでたどり着いた、やっこここまで、今度こそ、決着がつく、と心の底でつぶやいた。沢富の心は安らぎを感じていた。笑顔のかわいい女子店員からブラックを受け取るとニコッと笑顔を返してテーブルに戻った。男は黙ってブラックとちよつと気取ってググッと半分ほど飲んだ。もう一度深呼吸すると美緒を見つめ返事した。「わかった。今月までだな。それで、きっぱりと別れるんだな。約束だぞ」

美緒も最後の返事を迫られ、顔が引きつった。いつになくマジな顔つきできっぱりと返事した。「約束する。今月で終わりにする」沢富は、やっとなんか解放されたようなすがすがしい気分になった。大きくうなずいた沢富は、明るい声でこれからの予定を話し始めた。「よし、決まりだ。ドライブにでも、行くでしょう。まずは、昼飯だ。肉でも食うか。な、美緒」美緒はニコッと笑顔で返事した。「上場亭（うわばてい）ね。ほんと、佐賀牛、最高。しっかり精をつけて、今夜、頑張るね」今夜もかとい瞬気落ちしたが、今月までの辛抱だと自分を慰め苦笑いして立ち上がった。主人を待っていたかわいいクロスビーは、主人と美緒を乗せると国道202を唐津方面へ走っていった。

## パワハラお見合い

10月8日（月）体育の日、沢富は伊達家の会食に呼ばれた。いやな予感がしていた沢富だったが、結婚の話ではありませんようにと心の底で願いながらテーブルに着いた。ナオ子はいつものようにビールを注ぐと沢富に話しかけた。「ちょっと、肌寒くなってきたわね。ビールより、熱燗が良かったみたいだけど、まずは、ビールで乾杯しましょう」沢富は、いったい何の乾杯なのかと不安げにナオ子の天に向かって大きく開いた鼻の穴をちらっと覗きグラスを持ち上げた。ナオ子のカンパ〜〜イという甲高い声が響き渡ると三人はグググ〜〜と喉を鳴らした。上唇に泡を乗せた伊達は、笑顔で話し始めた。「おい、もうそろそろ結婚したらどうだ。ひろ子さんもプロポーズ待ってるんじゃないか？な〜。ナオ子」

ナオ子は、ここぞとばかり、ピクピクと鼻の穴を振るわせ賛同の声をあげた。「そうよ、もう、いい加減に結婚しなさいよ。ひろ子さんは待ってるんだから。サワちゃんのプロポーズ」やはり結婚の話のために会食に呼んだとわかり、一気に気持ちが冷めてしまった。美緒の件が片付いたのもひろ子のおかげだと思ったが、いざ、結婚を迫られると返事に困った。というのも、確かに、36歳になったこともあり結婚したいという気持ちはあったが、実は、母親からお見合いを迫られていたからだ。お見合いはきっぱり断りたかったが、むげに断ることができない相手だった。話を持ってきたのが、法務大臣の夫人だったからだ。内心、母親も断りたかったみたいだったが、やむなく写真と履歴書を受け取ってしまった。

青ざめた顔でビールを飲みほした沢富は、あいまいな返事をした。「いや〜、結婚は〜。まだ、早いような。ひろ子さんの気持ちもはっきりしていないことだし。ちょっとお〜」煮え切らない沢富に伊達は、ビールをグイッと飲み干すとハツパをかけた。「おい、女々しいやつだな〜。男だったら、勇気を出して、アタックしろ。断られたときは、その時だ、潔くあきらめればいい。ひろ子さん、意外と、ウンと言うかもしれんぞ？そう悲観するな」ナオ子も身を乗り出して追い打ちをかけた。「そうよ。プロポーズしてみなきゃ、相手の気持ちはわからないじゃない。いつまでも、黙っていたら、ひろ子さん、突然、結婚するかもよ。長崎で、お見合いしたって言ってたじゃない」

あまりの攻撃にどう反撃していいかわからず、沢富はお見合いの件を話すことにした。「実を言いますと、お見合いを迫られているんです。しかも、断れないようなお見合いなんです。母親も困っているんですが、一度はお見合いしないとまずいです。とにかく、このお見合いをうまく断ることができれば、ひろ子さんへのプロポーズを考えます。それまで、ちょっと、待ってもらえますか。とにかく、僕は、このお見合いのことで頭が痛いんです」思ってもいなかった事情に伊達夫妻は、目を丸くして口をポカ〜ンと開けて見つめあった。ナオ子は、万が一、このお見合いが成功しては一大事とお見合いについて聞きだした。「いったい、どんな方。良家のお嬢様？年齢は？」

あまりお見合い相手のことは話したくなかったが、黙ってはいはますます伊達夫妻に興味を持たせてしまうようで、わかってる範囲を話すことにした。「年齢は、35歳。T大卒の才女です。このお見合いは、法務大臣の奥さんが持ってきた話で、むげに断るわけにはいかないんです。まあ、そういうことで、勘弁してください」突然、目を吊り上げたナオ子は、何としても妨害しなければ、今までの努力が水の泡になってしまうようで気持ちが高ぶってしまった。顔を真っ赤にしたナオ子は、ヒステリックな声で話し始めた。「え、T大卒の35才。ダメよ、絶対、結婚を押し付けられるに決まってるわ。35歳よ。誰にも相手にされないから、サワちゃんのところに回ってきたのよ。一度、お見合いしたら、もうおしまい。地獄行き。あなたも、そう思うでしょ」

ちょっと言い過ぎみたいだったが、35歳を考えると、ナオ子が言っていることが正解のように思えた。伊達は、年齢より容姿に興味があった。「おい、顔はどうだ。美人か？」沢富は、これ以上具体的な話はしたくなかったが、できれば、二人からお見合いをしなくてもことを丸く収められる名案が聞けるのではないかと期待し、話すことにした。「それが、ちょっと、今一つなんです。僕好みではありません。T大の講師をなされているそうですが、なんと、資格が10以上、趣味は20以上もあるんです。僕も、本当は、お見合いなんてやりたくないんです。でも、断れば、きっと、まずいことになるような気がして。本当に、困っているんです」伊達は、沢富の気持ちが手に取るように分かった。ナオ子も最強の敵が現れたと気持ちがブルーになってしまった。

頭が真っ白になったナオ子は、のそっと立ち上がり、幽霊のようにふらふらとキッチンに向かった。しばらくすると、気持ちを切り替えたのか笑顔で鍋を運んできた。「熱燗に鍋。くよくよしても始まらないじゃない。今日は、パ〜とやりましょう。ね、あなた」伊達も、深刻に考えても名案が浮かばないと思い、明るくふるまうことにした。「サワ、そう、深刻になるな。俺たちに任せとけ。要は、お見合いをぶち壊せばいいってことだ。な〜ナオ子」2本の徳利（とっくり）と3つのお猪口（ちょこ）をお盆にのせやテーブルにやってくると笑顔で腰掛けた。「サワちゃんは、このお見合いに乗り気じゃないんでしょ。だったら、相手に嫌われたらいいのよ。そうだ、ガサツな男を演じればいいのよ。相手って、良家のお嬢さんでしょ、ガサツな男は、嫌いなはずよ。これって、名案じゃない」

沢富もなるほどと思った。要は、相手に嫌われればいい。いったいどうすればいいのか？沢富は、ナオ子に尋ねた。「ガサツって、どうやればいいんですか？是非、教えてください。今のままでも、結構ガサツなんですけどね」ナオ子は、大きくうなずき教師になったかのように胸を張って話し始めた。「いい、要は、下品なマナー。そうね、例えば、チューチューと音を立ててお茶を飲むとか、ムシャムシャと音を立ててご飯を食べるとか、ほかに、片肘ついて食べるとか、ため口で話すとか、いろいろあるじゃない。下品であればいいのよ。良家のお嬢さんだから、がっかりして、断ってくるわよ。サワちゃん、やってみなさい」なるほどと思い早速やってみることにした。

お猪口のお酒をチュ〜チュ〜と音を立てて飲んでみた。次に片肘をつけて湯豆腐をムシャムシャと音を立てて食べてみた。ナオ子が笑顔でほめた。「その調子。やればできるじゃない。きっと嫌がられるから。あ、そうだ、極めつけは、食べ終わったら、クチュクチュってお茶でうがいをするといいわ。間違いなく、嫌われる」伊達もここまで下品であれば、嫌われると思った。「いいぞ、サワ、その調子だ。徹底的に嫌われろ。さすが、ナオ子。こんないい手があったとは」後輩のお嬢さん相手に下品な真似はやりたくなかったが、この際恥を忍んでやってみることにした。「わかりました。できる限り、下品な振る舞いをやってみます。要は、相手に嫌われればいいんですよ」

名案が浮かんだと思っではみたが、ナオ子は何となく不安になってきた。というのは、35歳の相手はわらをもつかむ思いで臨むと考えたからだ。おそらく、少々の下品さには目をつぶって、結婚するように思えた。彼女もT大卒。サワちゃんの父親は警察庁長官。仲人は、法務大臣。これは、ちょっと甘く考えていたように思えた。「あなた、ちょっと、この作戦は、ヤバイかも。万が一、相手が、結婚したいって言ってきたら、どうしよう。それこそ、断るわけにはいかないでしょ。やっぱ、ダメ、お見合いしたら、それまでよ。とにかく、どうにかして、お見合いを断る作戦を立てないと」伊達は、首をかしげ、ナオ子に苦言を呈した。「そういっても、断るわけにはいかないんじゃないか？話を持ってきたのは法務大臣の奥さんなんだぞ。お見合いを断れば、サワの将来にかかわるんじゃないか？」

ナオ子は、苦虫をつぶしたような表情で答えた。「そんなことは、わかってるわよ。だからといって、お見合いしたら、間違いなく、結婚させられるわよ。相手は、35歳よ。切羽詰まっているのよ。女も35歳を超えてしまえば、行けず後家よ。相手は、必死なの。そうだわ。こうなったら、ひろ子さんをご両親に紹介する以外ないわ。サワちゃんに、決まった人がいるとわかれば、相手の方も納得するはず。断ったとしても、相手を傷つけることはない。サワちゃん、すぐにひろ子さんにプロポーズしなさい。サワちゃんを救う道はこれしかない。ひろ子さんもきつとウンと言うから。サワちゃん。勇気を出して」沢富もお見合いをすれば、結婚を迫られるように思えてきた。

しばらく、沢富が黙っていると伊達はお猪口をグイッと飲み干し、ハツパをかけた。「勇気を出せ。ひろ子さんに断られたときは、潔くあきらめろ。そうすれば、新しい道が開けるってものだ」ナオ子は、しかめっ面で伊達を見つめた。「あなた。何、弱気なことを言ってるの。ひろ子さんを説得するのが、仲人の役目じゃない。おぜん立ては、任せて。明日、非番を確認してみる。サワちゃん、うまくやって見せるから、勇気を出して、プロポーズするのよ、いい。男は、度胸。やるときは、やらなきゃ。結婚って、一大事業よ。わかった」沢富は、大きくうなずき返事した。「はい。清水の舞台から飛び降りる気持ちでプロポーズします。よろしくお願ひします」



8月9日（火）ナオ子はひろ子に非番の確認の電話をした。幸運なことに、今日が非番だった。ナオ子は是非とも話したいことがあるとひろ子をランチに誘った。ひろ子も話したいことがあるということで11時にナオ子を迎えに行く約束をした。二人は、11時15分にマンションを出発すると国道202を糸島方面に向かった。助手席のナオ子は、どこに行くか尋ねた。「人気のレストランって、どこにあるの？」ひろ子は、即座に返事した。「最近、よく、お客さんを乗せていくレストランで、エルミタージュっていう評判のお店。西区にあるんです。予約は12時。イタリアンのお店で、特に、オマールエビパスタがおいしいそうです。一度、オマールエビを食べてみたかったです。ワクワクするわ」ナオ子もおいしいエビが食べられると聞いて急にお腹がすいてきた。

赤のスイフトスポーツが、飯氏東（いいじひがし）交差点を過ぎて看板の指示に従って国道から南斜め方向の道に入っていくと、小さな森の中に童話に出てきそうなかわいいレストランが現れた。二人は正面の小さな駐車場から階段を上り入店すると愛想のいいウェイトレスの歓迎を受けた。店内はこじんまりとして豪華さはなかったが、ゆっくり話すのは最適なように思えてナオ子は気に入った。ひろ子が予約を伝えると二人は窓際のテーブルに案内された。ナオ子は腰を下ろして窓から南側を見てみると学校が見えた。「静かで、いいレストランじゃない。ちょっと気づきにくい隠れた場所にあるのに人気あるなんて、よっぽどおいしいってことよね」ひろ子は、恐らくそうだと思うなずいた。「この前乗せたお客の話では、ここのシェフって、ヒルトンホテルで修業した人で、すごく腕がいいんだって」

ご馳走に目のないナオ子の気持ちは高ぶっていたが、沢富の事情を話すことにした。「ついたばかりで、なんだけど、話というのはサワちゃんのことなの。ひろ子さんは、サワちゃんのこと、どう思う？はっきり言って、結婚の対象として考えられる？」突然の質問に一瞬顔が引きつったが、この件はいずれは話さなければならないと考えていた。「沢富さんは、いい人だと思います。でも、まだ、3回ほどしかデートしてないし、何と言っていいか。嫌いじゃないんです。何というか、自分の気持ちがはっきりしなくて。困ったことに、また、お見合いをすることになったんです。母は、すごく言い方だから、結婚したほうがいいっていうんです。もう年だし、バツイチだし、いい人だったら、結婚してもいいかなって、思うんです」

ひろ子のほうにもお見合いの話が来ていたことに啞然とした。ナオ子は、頭をフル回転させた。高ぶった気持ちを抑えながらしばらく考えた。こっちのほうもお見合いしてしまえば、結婚の可能性は高い。そうなれば、沢富の仲人の話は水の泡。そうなってしまえば、主人の警察署長の話も危うくなってしまふ。どうにかして、二人のお見合いを阻止なければ。とにかく、二人にデートをさせて、沢富にプロポーズさせる以外に方法はない。身を乗り出したナオ子は、周りのお客に気を使って小さな声で話しかけた。「ひろ子さん、ちょっと、そのお見合い待ってもらえない。サワちゃんが、ぜひデートしたいって言ってるの。お見合いは、サワちゃんの気持ちを聞いてからってことにしてほしいの。お願い。いいでしょ」ナオ子は、両手を合わせてお願いした。

ひろ子も沢富には一度会ってお見合いのことを話したいと思っていた。悲壮な顔でお願いするナオ子が気の毒になり笑顔で返事した。「わかりました。私も、サワちゃんに会いたいと思っていたところなんです」ホッとしたナオ子は、お冷をグイグイツと半分ほど飲んだ。頭を冷やしているとオマールエビのパスタが運ばれてきた。ひろ子が目を丸くして歓喜の言葉を発した。「すっごく、いい香り。チョー、おいしそう。ナオ子さん、さあ、食べましょう」ナオ子も初めて見るオマールエビに目を丸くして、返事した。「ほんと、いい香り。どんな味かしら」二人は、目を輝かせ無言でパスタを口に押し込んだ。ひろ子は、歓喜の声をあげた。「こんなにおいしいパスタ初めて。人気があるのわかる。口コミで、関西からやってくるのも、納得、納得」

無言でうなずいていたナオ子も笑顔で感想を述べた。「まったく、こんなの、初めて。こんなにおいしいエビがあったとは、今まで生きていてよかったわ。ひろ子さん、今日は、記念すべき日ね。そうだ、ひろ子さん、サワちゃんここでデートしてはどう。きっと、サワちゃん、感激するから。ね」ひろ子もこのレストランだったら、ゆっくり話ができそうな気がした。「そうですね、サワちゃんに誘われたら、ここに案内します」ナオ子は、周囲を見渡し満席になってることに気づいた。そして、小さな声で尋ねた。「このエビって、高いんじゃない」ひろ子も小さな声で話し始めた。「いえ、リーズナブルなんです。ここのシェフは、すっごく気前がいいんだって。だから、オマールエビ目当てに、遠方からでもやってくるそうです」ナオ子は、ちょっと安心したのか、うなずいて窓の外に目をやった。

## 性癖（せいへき）

10月14日（日）美緒はまだベッドの中だった。カーテンの隙間から差し込んだ光は、湿った部屋をほんのり暖めていた。先週、沢富との別れを決意して以来、全身の力が抜けてしまったように何をするにもけだるく感じられた。昨夜も、沢富と別れた後のことを考えると、孤島に一人放り出されたかのようにさみしさにいっぱいになった。また、ここ数日、熟睡できない日々が続いていた。そのせいか、日曜日だからため込んだ洗濯物を洗濯しようと必死に起き上がろうとしたが、腰に力が入らず、少し体が浮くとドスンと体がもとに落ちた。時計の針は、すでに午前10時を回っていた。再度、よし、と気合を入れて起き上がろうとしたが、やはり、頭は持ち上がらなかった。

しばらくぼんやりしていると、父親からゆう子へ、さらに沢富への性体験が脳裏のスクリーンに映し出されていた。今は亡き父親、別れが迫る沢富、二人のことを考えると、美緒はさみしきの谷底に引きずり込まれる思いだった。沢富が現れてからは、ゆう子との関係はなくなった。でも、沢富との別れが決まってから、ここ数日、ゆう子のことばかり考えるようになった。そんな時、奇妙なことに突然、鳥羽のブサイクな笑顔がスクリーンにクローズアップされ、美緒を励ますのだった。美緒は、同年代の男子とデートしたこともセックスしたこともなかった。また、同年代の男子アイドルにも興味がなかった。美緒にとって、同年代の男子を意識したのは初めての経験だった。

心の底で、「鳥羽ク〜ン」と小さな声で叫んでみた。すると、バリバリド〜ンという天地を引き裂く爆音とともに、マグマのような鈍い輝きを放つ明石教授の巨大な眼球が暗闇の割れ目から現れ、それは鳥羽への純情を打ち砕くように鋭い視線を美緒の心に突き刺した。そして、一瞬にして、美緒の体は、蛇ににらまれたカエルのように体が動かなくなった。しばらくして、好色な明石教授の視線が消え去るとなぜか、基礎看護学実習の風景が脳裏に浮かんできた。この時、明石教授は必ずといっていいほど美緒に好色な視線を突き刺していた。そして、手を握ったり肩を触ったりするのであった。美緒は、自分の心が見透かされているようで恥ずかしかったが、体は自然に反応して熱くなっていた。小学校5年生の時から性体験は、中年に反応する体を作り上げていた。

明石教授には教職にあるまじきうわさがあった。美緒は、鳥羽から知らされたうわさで定かではなかったが、美緒に対する態度から信ぴょう性が感じられた。その噂というのは、彼には、数人の愛人がいるという噂であった。その愛人の中には、看護師だけでなく、学生もいるということだった。明石教授の好色な視線を感じるとその噂は本当のように直感できた。でも、それは、美緒にとって不愉快なことではなく、歓迎すべきことだった。沢富と別れた後は、次のセックスフレンドを作りたいと思っていたからだ。おそらく、ちょっとした誘いに乗れば、即座にセックスフレンドになれる予感がした。すでに、心の奥底に潜む淫靡な気持ちは、明石教授の誘いを待っていた。

最近では、美緒の性感は明石教授の体を求め始めているのか、無意識にたわいもない質問をしたり、何気なく接触するようになっていた。あたかも美緒の体は、明石教授の魔の触手を引き寄せているようであった。周りの学生も、明石教授の美緒への態度に嫌悪感を感じ始めていた。一度、ある学生が、セクハラじゃない、と美緒に囁いたこともあった。美緒は、苦笑いして聞き流したが、明石教授の態度はそれほどあからさまなものだった。明石教授の美緒に対するセクハラのうちわさは、美緒にとっても不愉快なものとなった。美緒へのセクハラのうちわさが広がるぐらいならば、いっそのこと、美緒のほうからアクションをかけて、セックスフレンドの関係を作ってしまいたい気持ちになっていた。

いったんセックスフレンドの関係を作ってしまえば、男性は関係がばれないようによそよそしい態度をとるようになることを知っていた。美緒は、11月に入れば、明石教授との関係を発展させてもいいような気持ちが強くなり始めていた。でも、そう思う一方で、鳥羽の忠告が頭の奥底から響いてくるのだった。中年はやめとけ、という言葉が頭いっぱい響き渡ると同時に鳥羽の笑顔が浮かび上がってきた。心の底では、自分の性癖を変えたいという思いがないわけではなかった。でも、自分の力だけではどうにもならないこともわかっていた。今まで何度か、頭では過去を忘れようとしたが、体は決して忘れようとはしなかった。中年の明石教授に見つめられると、頭では拒否していても、体は反応し、すぐに熱くなるのだった。

美緒は、中年好みを疑問に思う時もあったが、自分の感じる体を嫌いになれなかった。体が求めるものをあえて心で遮りたくなかった。でも、鳥羽の意見を聞かされるたび、次第に、自分の性癖に悩むようになっていた。17、8だからといって、中年を好きになってはいけないというようなそんな道徳や恋愛観はない。恋愛は、いかなる場合も自由だと思い続けていた。でも、最近では、同年代の男子を好きになれない自分に疑問を感じるようになっていた。また、どうして若い男子に感じないのか？このような疑問がたびたび起きていた。ところが、ここ2、3日前から、鳥羽の顔を思い浮かべていると、次第に熱くなる自分に気づいた。若い男子を思って熱くなったのは、鳥羽が初めてであった。

なぜ、あのブサイクな顔に熱くなるのか不思議だったが、初めての経験にうれしさが込み上げるのだった。そして、夜寝るときにはおやすみなさい、朝起きるときにはおはよう、と鳥羽の顔を思い浮かべ、心の底であいさつをするようになった。怪物のようなブサイクな顔と嫌悪していたが、なんとなく、かわいく見えてきて、いつでも、じっと見つめてほしい気持ちになっていた。そして、鳥羽のやさしいキスで起こしてほしいという願望が起きているのではないかと自分の気持ち確かめてみた。すると、朝起きれないのは、沢富との別れの悲しみが原因ではなく、鳥羽への恋心であることが判明した。そのことがわかるとますます鳥羽への恋心が強くなった。

小学校のころから作られた性癖は、体が疼き出すと頭が真っ白になることだった。父親の横でいったん眠りにつくと夢遊病者のように無意識に体が動いているようだった。朝起きてみると、穿いていたはずのショーツが脱ぎ捨ててあった。必死に思い出そうとしても、昨夜の自分の行動は思い出せなかった。そして、なんとなく、不思議な満足感に包まれるのだった。沢富のマンションに行った時も、突然、頭が真っ白になり時間の空白ができた。気づいた時は、ベッドの上でふんわりとした満足感に包まれていた。突然変異が起きたのか、ここ数日前から、鳥羽の笑顔が脳裏に現れると次第に体が熱くなるようになった。そして、沢富の時と同じように頭がぼんやりとし始めた。

頭の中に時間の空白が起きると美緒の左手はスマホを握り、右手の指は鳥羽のイニシャルをタッチしていた。一方、朝の五時に起きた鳥羽は、安部教授の膨大な実験データを論文に引用できるようにエクセルで整理していた。頭をフル回転させエクセルを操作しているとヘビーローテーションの着メロが鳴り響いた。今頃だれだろうとスマホを覗くと美緒からだった。こんな時に美緒かと内心舌打ちしたが、スマホにタッチした。「はい、何だい？」美緒は、即座に苦しそうな声で助けを求めた。「助けて、苦しいの。起きれないし、熱もあるみたい。早く、助けて」鳥羽は突然の助けを求める悲痛な声に腰を抜かした。もしかしたら、食あたりでも起こしたのではないかと思った。

鳥羽は、即座に返事した。「わかった。きっと、食あたりだ。今すぐ行く。待ってろ」残りは午後にやることにして美緒のマンションにかけていった。鳥羽は、エントランスから大声で「開けて下さ〜い。お願いしま〜す。病気なんです」と管理人を呼んだ。入口左手にある管理人室でTVを見ていた管理人が何事かとびっくりしてエントランスに現れた。303号室の友達が急病ですぐに来てほしいという連絡があったことを管理人に伝えると疑いのまなざしでしぶしぶ入館を許可した。鳥羽は、刑事上がりのような鋭い目つきの管理人と一緒にエレベーターで3階に上がった。

二人が303号室のドアの前に立つと管理人は、鳥羽に大声で相手の名前を呼ぶように指示した。しかめっ面の管理人の顔をちらっと見ると鳥羽は、大きな声で美緒に到着を伝えた。「みお〜、大丈夫か〜？助けに来たぞ〜」奥のほうから美緒の声が返ってきた。「入って、鳥羽ク〜ン。ありがとう〜」管理人は、不審者でないことを確認し、入室を許可した。「ここは、男子禁制だ。病状がひどいようだったら、救急車を呼ぶように。今回は特別だぞ。30分以内に出ていくように。いいな」目を吊り上げた管理人は、命令口調でそういうと熊のようにのっそのっそと巨体を揺らしながらエレベーターに向かった。

鳥羽は、駆け足でリビングに行くとりリビング右手の部屋のドアを押し開けた。ベッドには、美緒が苦しそうな表情で寝ていた。鳥羽は、ベッドの枕元にかけていった。「おい、大丈夫か？昨日、何喰った。食あたりじゃないか？熱は何度だ？」美緒は、小さく首を振った。「はかっけない。起きれないんだもん。食あたりじゃないと思う。夕食は、野菜炒めとさんまの焼き魚、それとみそ汁にご飯。食後はデザートでキーウイとヨーグルト。あたるようなものは食べてない。体がだるくて、頭がボ～～とする。風邪かな～～」美緒は、適当に答えた。

鳥羽は、管理人の言葉を思い出し、体調を確認した。「病院に行かなくてもいいのか？起きれないんだったら、救急車、呼ぼうか？」美緒は、素早く顔を振った。「大丈夫。鳥羽君が来てくれたから、気分が落ち着いた。さっきまで、心細くて、涙が出そうだった。しばらくしたら、元気が出ると思う」鳥羽は、このままほっといいか悩んだ。管理人の30分以内という時間制限を思い出し、一応体温を確認することにした。「体温計は、どこだ？一応、体温は測っておかないとな」体温計はクローゼットの中の木製の救急箱にあった。半身になった美緒は、クローゼットを左手で指さし返事した。「そのクローゼットの中に救急箱がある。そこに入ってる」鳥羽は、クローゼットを開き中をのぞいた。クローゼットにかけられていた甘い香りのする服の下に救急箱は置かれてあった。

救急箱を開けた鳥羽は、体温計を取り出し、枕元にやってきた。「はいよ」体温計を受け取った美緒は体温計をわきの下に差し込んだ。「鳥羽君って、やさしいのね。きっと、熱は下がってると思う」元気そうな美緒の笑顔を見た鳥羽は、管理人の話をすることにした。「あの管理人、ちょっと怖いよな。刑事あがりじゃないか。容疑者を見るような目つきで、俺をじろっと見るんだ。参ったよ。しかも、30分以内に出て行けとさ」美緒も管理人が怖かった。「鳥羽君も、そう思う。ほんと、怖いよ。たとえ彼氏でも、入れないみたい。今回は、美緒が病気ということで、特別に入れたんでしょ」美緒が言う通りだった。鳥羽は、時間を気にしていた。「あの管理人は、おっかないよ。時間をオーバーでもしたら、放り出されるんじゃないか」

美緒もそんな気がした。「あと何分ぐらい？」鳥羽は、腕時計を見た。「あと15分ぐらいだな。美緒が元気そうだから、安心したよ。もういいんじゃないか？」美緒は、体温計を取り出すとメモリを読んだ。「36.6℃、よかった。胸も苦しくなくなったし。なんだか、気分がすっきりしてきた。鳥羽君の念力よ」念力と聞いた鳥羽は、ワハハ〜と笑い声をあげた。「まあ、そういうことにしておこう。とにかく、元気な顔が見れて、ホッとしたよ。もう、そろそろ帰らないと。あの管理人、怒鳴り込んでくるような気がする。でも、ああいう管理人は、親御さんには人気があるんだよな。最高の虫よけになるからな」美緒もクスクスと笑い声をあげた。「鳥羽ク〜ン、駆け付けてくれたお礼に、いいものあげようか？」

鳥羽は、恩を着せているようで、お礼に物をもらうのは気が進まなかった。「いや、そう気を使わなくていいさ。困ったときは、お互い様さ」美緒は、掛け布団をはねのけるとヒョイと起き上がった。小さなキティーちゃんがちりばめられたパジャマ姿の美緒は、ベッドをすりと降りてクローゼット横にあるピンクの5段チェストに向かった。背を向けた美緒は、鳥羽に声をかけた。「鳥羽君、あっち向いてて」鳥羽に背を向けたままゴソゴソ音を立てると小箱をもってベッドに戻ってきた。ベッドに腰掛けた美緒は、鳥羽にスヌーピーがプリントされた小さな箱を手渡した。「はい、お土産」鳥羽は、断ろうかと思ったが、せっかくくれたものを突き返すのも悪いような気がしてもらうことにした。

手渡された小箱を両手で持って頭をちょこんと下げた。「そうか。悪いな。本当にいいのか？」美緒は、笑顔を作りクスクスと笑い声をあげた。「何が入っているかは、開けてのお楽しみ。後で、ゆっくり見てちょうだい」スヌーピーの小さなぬいぐるみでも入っているんじゃないかと思ったが、全く重さを感じない小箱に謎めいたものを感じた。「何だろな〜。そいじゃ、もう帰る」鳥羽は、笑顔を美緒に送り素早くドアに向かった。エレベーターを待つほどではないと思った鳥羽は、コトコトと靴音を響かせ一階まで一気にかけて降りた。管理人室をそっと覗くと、真剣な表情の管理人がノートパソコンのキーボードをたたいていた。鳥羽は、挨拶をして帰ることにした。「帰ります。大したこと、ありませんでした。お騒がせして、ご迷惑かけました。ありがとうございます」鳥羽に顔を向けた管理人は、無愛想な返事をした。「あ、そうか。それはよかった」鳥羽は、ちょこんと頭を下げて出口に向かった。



寮に戻った鳥羽は、勉強机の椅子に腰かけると「ハ〜〜〜」とため息をついた。まったく人騒がせなヤツだと思いつつ、机の上に置いた小箱を見つめた。いったい何をくれたんだろうと思うと、一刻も早く見てみたくなった。左手の親指の先で上蓋を開くと、ビニールに包まれたピンク色の布が入っていた。ビニール袋を取り出し、中のものを取り出してみると小さな女子用のショーツだった。なんだこりゃと思った鳥羽は、ポイと机の上に放り投げた。いったいどういうつもりなんだ、何が、お土産だ、人を馬鹿にするにもほどがあると思ったとたん、急激に、怒りが込み上げてきた。血が上った鳥羽は、美緒に電話した。3度呼び出すと美緒の返事の声が返ってきた。鳥羽は、即座に怒鳴った。「美緒、どういうつもりだ。なんだ、これは」

美緒は、文句を言ってくるのを予測してたかのように即座に返事した。「鳥羽君の欲しがっていたものよ。気に入らないの？」鳥羽は、自分が変態だと思われていると思い、怒鳴りつけた。「おい、俺は、変態じゃない。美緒のショーツをもらって、喜ぶとでも思っているのか。バカにするんじゃない」ハハハハハと美緒の笑い声が左耳に飛び込んできた。鳥羽の怒りは頂点に達していた。「何がおかしいんだ、こんなもの、生ごみと一緒に捨てるからな。いいな」ハハハハハと笑い声が再び聞こえてきた。「え〜〜生ごみと一緒に捨てるの？いいの、捨てたりして、それって、ゆう子先輩のショーツなのよ」美緒はクスクスと笑い声をあげた。ゆう子先輩のショーツと聞いた鳥羽は、一瞬息が止まった。

鳥羽は、言葉に詰まってしまった。しばらくピンクのショーツを見つめると返事した。「本当に、ゆう子先輩のモノか？どうして、美緒が持ってるんだ」また、クスクスと笑い声をあげた美緒は、事情を説明することにした。「美緒はね、鳥羽君に、中年はやめとけ、って言われたじゃない。それで、ゆう子先輩にも相談しようと思って、翌日の日曜日にゆう子先輩のうちにいったの。月曜日は体育の日で祭日だったから、その日は泊まったの。それで、一緒にお風呂に入って、ゆう子先輩の背中を洗いながら、中年について聞いたの。そしたら、ゆう子先輩も、鳥羽君と同じ意見だった。やっぱ、鳥羽君のアドバイスは、正しかったとつくづく思ったのよ。それで、鳥羽君へのお礼に何がいいかな〜、鳥羽君が喜ぶものは何かな〜、って思った時、これだって思ったのよ。頑張ったんだから。それ、いらないの？本当に捨てる気？」

本当にゆう子先輩のショーツであれば、捨てることができるはずがなかった。「今の話は、マジなんだな。正真正銘のゆう子先輩のショーツなんだな」美緒は、柄にもなくマジな表情で強い口調で返事した。「マジよ。嘘なんか言うわけじゃない。鳥羽君に喜んでもらおうと、勇気を出して、ネコババしてきたんだから。いらないんだったら、返してよ。捨てたりしたら、ゆう子先輩に申し訳ないわよ」いったい何とって返事していいか、頭が混乱してしまった。ショーツをありがたくもらうといえば、変態のようだし、でも、正真正銘のゆう子先輩のショーツと知ると、家宝にしたい気持ちにもなった。

気まずそうに鳥羽は話し始めた。「いや、ゆう子先輩のショーツとわかれば、捨てないさ。まあ、何とていばいいか、美緒が俺のためにネコババしてくれたとなれば、感謝しなければならぬし、そうだよな、美緒に感謝して、ありがたく頂戴いたします。でも、俺は、変態じゃないからな。ゆう子先輩のショーツを家宝と思い、大切に保管するということだ。さっきは、怒鳴って、悪かったな」クスクスと小さな笑い声が鳥羽の耳に入ってきた。ベッドに腰掛けていた美緒は、うまくいったと笑みを浮かべていた。「もらってくれるのね。よかった。大切にしてくれ」鳥羽は、ピンクのショーツを右手で握りしめ返事した。「ありがとよ。そいじゃな」美緒が電話を切ると鳥羽も切った。

ピンクのショーツをゆう子姫のものと真に受けた鳥羽は、ショーツの股間部分をかいてみたくなった。自分を変態ではないと思いつつ、やはりゆう子姫が穿いていたと思うといてもたってもいられなくなった。机にショーツを広げ股間部分に鼻をくっつけてみた。イヌのようにクンクンとかいてみると甘いバラのにおいがした。香水の匂いのようなであったが、ゆう子姫の匂いだと思うと夢心地になった。匂いにしびれてしまった鳥羽は、指を振るわせながらショーツをそっと折りたたみビニール袋に入れた。その袋を両手でそっと持ち上げると軽くお辞儀して小箱に戻した。袖の一番下の引き出しを引くと小箱を丁重に置き、静かに引き出しを戻した。頭の中には、ピンクのショーツにピンクのブラのゆう子姫が浮かび上がっていた。

## 幸運

10月21日（日）ひろ子にプロポーズした沢富は、ようやくひろ子から結婚承諾の返事を得たが、沢富はそのことを母親に報告すると、ひろ子の家系と素性が気に入らないらしく、母親はひろ子に直接会って断りを入れると言い出した。困り果てた二人は、伊達夫妻の援護を求めるためにやってきたのだった。仲人ができると喜んでいた伊達夫妻だったが、母親に反対されては、すべてが水の泡になると思い、必死になって対応策を考えていた。ひろ子がバツイチであること、職業がタクシーの運転手であること、家系が漁業であること、それらのことが反対の理由と思われたが、二人は、いかなる理由で反対されたとしても、結婚の意思は、ダイヤモンドよりも固いと、伊達夫妻に伝えた。

伊達夫妻もこの結婚は、必ず、成就させたかった。仲人に成功すれば、沢富家とのつながりができ、出世も確実なものになると思われたからだ。沢富は、絶望的な声で伊達に話しかけた。「どうしましょう。せっかく、ここまでたどり着いたのに、いったいどうすればいいんですか。母は、いったん言ったことをそう簡単に変えるような人じゃないんです。福岡にまでやってくるということは、きっぱりケリをつけるということです。ア～～、こんなことがあっていいんでしょうか。おそらく、父親も反対しているということです。もう、僕の人生は終わりです」伊達夫妻も困り果てた顔でうなずいていた。伊達は、打開策がわかったわけではなかったが、返事した。「そうか。反対されたか。お母さんが相手じゃ、俺らだって、何と言って説得すればいいか、よくわからんな～～」

ナオ子も母親相手じゃ、どう対応していいか、困惑してしまった。仲人したいばかりに、下手に二人の結婚を支援して、母親に嫌われてしまえば、出世どころではなくなってしまう。警察署長は、夢で終わってしまうように思えた。ナオ子も困り果てた顔で話し始めた。「お母さまがね～～。反対ですか。ひろ子さんは、素晴らしい人なのに。どこが、気に入らないっていうのかしら。タクシーの運転手だって、りっぱな職業じゃない。サワちゃん、ひろ子さんのこと、しっかり褒めたの。お母さまに、ひろ子さんの良さが、伝わってないんじゃないの。でも、本当に困ったわ。お母さまに、何と言って説得すればいいか？あ～～、困った。困った」

二人は、うつむいて今にも死にそうな表情でため息ばかりついていた。伊達夫妻は、必死に結婚の許しをお願いすべきだと思ったが、単にお願いだけでは納得しように思えなかった。ひろ子さんの素晴らしいさを披露する以外ないように思えた。「ひろ子さんは、歌は上手なのよ。まずは、歌が上手だということを訴えることね。次に、料理はどうかしら。ひろ子さん、歌以外に何か、得意なことはないの？」ひろ子は、さみしそうな顔で答えた。「すみません、歌以外、得意なことといわれても、これといったものは」ナオ子は、とにかく材料を探さねばと必死になった。「そう、習い事に通えばいいのよ。今からでも、遅くないわ。とにかく、料理に、お花に、お茶に、着付けに、お母さまが喜びそうな習い事に通うのよ。ひろ子さん、いい」

ひろ子は、顔をゆがめて返事した。「でも、タクシーの仕事があるから、それは、ちょっと。料理ぐらいだったら、どうにか」うなずいたナオ子は、ほかに何かいい方法はないか頭をひねった。「あなた、名案はないの？ボ〜〜としていても、いい知恵は浮かばないのよ。どうよ、何か思いついた？」伊達は口をとがらせ反論した。「バカ言うんじゃない。俺だって、真剣に考えてるさ。でも、どうしろっていうんだ？ひろ子さんは、今のままでいいんじゃないか？歌はうまいし、やさしいし、思いやりはあるし、美人だし、こんなに素晴らしい女性は、いないんじゃないか。だから、俺たちは、ひろ子さんを選んだんじゃないか？なにも、小細工なんかしないでいい。正々堂々と胸を張って、飾ることなく、立ち向かえばいいんだ。学歴とか、家柄とかで、結婚するんじゃない。二人の気持ちだ、そうだろ。ナオ子」

ナオ子もうなずいた。結婚は二人の気持ち。愛し合っていれば、家庭は守っていける。ナオ子は、自分が浅はかだったことに気づいた。「そうよね。学歴があっても、家系が良くても、愛がなければ、家庭は崩壊する。ひろ子さん、素直な気持ちで、自分をさらけ出して、本当の自分を見せればいいのよ。それでも、お母さまに反対されれば、駆け落ちしなさい。サワちゃん、覚悟はできてるでしょ」伊達は、マジな顔で力強く返事した。「はい。覚悟はできています。刑事をやめてでも、ひろ子さんと結婚します。僕は、どんな仕事でも、やって見せます」ひろ子は、心ではうれしかったが、駆け落ちだけはしたくなかった。沢富には、やらなければならない将来の仕事があると考えていたからだ。

ひろ子は、結婚のことでみんなに迷惑をかけているようで肩身が狭かった。また、駆け落ちまでして結婚しても、幸せになれないと思えた。「皆さん、心配してくれてありがとう。結婚は、祝福されてするものだと思います。ご両親に反対され、駆け落ちして結婚しても、幸せになれないように思います。もし、お母さまがガンとして反対されれば、あきらめます。サワちゃんの未来を台無しにしてまでして、結婚はできません。サワちゃん、ごめんなさい」沢富は、何と答えていいかわからなかった。いったい、どこが気に食わないんだ、と母親に食ってかかりたい気持ちでいっぱいだった。「そう悲観しないでいいですよ。母親だって、一人の女性です。ひろ子さんの気持ちを踏みにじるようなことはしないはずですよ。ありのままの姿をぶつけてください。きっと、わかってくれるはずですよ。二人で、頑張ろう」

10月28日（日）二人は、母親と一緒にエルミタージュにやってきた。エルミタージュのオマールエビのご馳走を食べさせ、機嫌を取る作戦に出た。窓際の席で母親と向かい合った沢富は、この店の説明をすることにした。「お母さん、どうです、エルミタージュ、おとぎの国のお店みたいで素敵でしょ。この店に来るといいことが起きるんです。シェフも、ウェイトレスも、すごくいいかたなんです。ほら、あそこに見えるのは、高校です。先生たちも、よく来られるそうです。この店は、すごく人気があって、県外からも、来られるということです。な～、ひろ子」ひろ子はうなずき小さな声で「はい」と返事した。これ以上言葉が出てこなかった。母親に嫌われているように思えたひろ子はうつむいてしまった。

沢富は、不機嫌そうな顔の母親を見て、無理に笑顔を作り話し始めた。「食事の後は、鏡山（かがみやま）に行きましょう。そこからは、虹の松原が一望できるんです。とても、壮大で、美しいんです。そう、唐津城も見えますよ。きっと気に入ります」母親の表情には、一向に笑顔が現れなかった。母親は、ひろ子に質問した。「ひろ子さんは、一度、離婚なされたと聞きましたが？」離婚と聞いたひろ子は、心臓が止まりそうだった。落ち着け落ち着けと言い聞かせながら、ひろ子は答えた。「はい。22の時に結婚して、24の時に離婚しました」ひろ子は、それだけ言って、うつむいてしまった。母親は、隠し子がいるのではないかと勘繰っていた。「子供は、できなかったんですか？」ヒョいと顔を持ち上げたひろ子は、即座に返事した。「はい。子供はできませんでした」

母親は、少しほっとした。さらに質問を続けた。「親御様は、ご健在なのですか？」ひろ子は、少し陰のある表情を作り返事した。「今のところは、どうにか。でも、父親は、体調が悪く。病院通いをしています。でも、姉夫婦と暮らしていますので、心配はしていません。漁業の方は、義理の兄が取り仕切って、跡を継いでいます」母親は、小さくうなずいた。「ひろ子さんは、タクシーの運転手をなされていると聞きましたが、何年ぐらいなされているの？」ほんの少し笑顔を作り返事した。「25歳からです。車が好きなんです。今では、AIタクシーに乗っています。すごく、人気があるんですよ。車内で、カラオケもできるんです」AIタクシーに乗ったことはあったが、カラオケタクシーは初耳だった。「へ～、カラオケね。そういえば、ひろ子さんは、カラオケ女王でしたね。東京でも、ひろ子さん、評判よ。なんだっけ、ほら、ガンダムの歌」

ひろ子は、東京でも人気があると聞かされ気持ちがハイになってきた。「そうですか。うれしいです。水の星へ愛をこめて、アニソンが大好きなんです」母親は、歌が上手なことは評価していたが、だからといって結婚を許す気にはなれなかった。「ひろ子さんは、都会での生活の経験は、おありですか？」ひろ子は、対馬（つしま）と福岡の田舎生活だけであった。「都会は、ありません。田舎者です」母親は、ちょっと顔をゆがめた。「武史は、近々、東京勤務になります。ひろ子さんは、東京でちゃんとやっていけますか？」寝耳に水の話でひろ子は固まってしまった。ひろ子は、沢富はこれからも福岡で勤務すると思っていた。「え、東京ですか？いつからですか？そんなこと聞いてません。いったいどういうこと？」ひろ子は、沢富の顔をにらみつけた。

沢富も初めて聞く話だった。「お母さん、いつ決まったんですか。僕は、県警勤務です。警察庁ではないんです。何かの間違いでしょ」母親は、お冷をほんの少しすすり返事した。「もう、この辺で警察勤務は終わりにするそうです。お父様が、警察庁に戻すといわれてました」沢富は、母親がやってきた理由が今わかった。東京に戻す話をしにやってきたんだと。「お母さま。ちょっと、それはないでしょう。そんなことを今言わなくても。ひろ子さんだって困ってますよ」母親は、全く表情一つ変えず話を続けた。「これは、お父様の指示です。文句があるのなら、お父様に言ってちょうだい。私は、伝えるように言われただけですから」あまりの一方的な話に怒りが込み上げてきた。「まったく、自分勝手なんだから。一言、前もって言ってくれたらいいのに。親父のヤツ」

母親は、不機嫌そうな表情のひろ子をちらっと見て話し始めた。「そういうこと。おそらく、来年は、東京勤務でしょ。でも、法務大臣から、ご褒美があるらしいわよ。よかったじゃない。もうこの辺で、出世してもらわないとね。世間体ってものがあるんですから。私は、ホッとしたわ。二人のことは、お父さんに報告してから、返事します」沢富は、ひろ子の不機嫌な顔を見ているとなんと言っているかわからなくなってしまった。「とにかく、お母さん、ひろ子さんは、僕にはもったいないくらいの人なんです。気に入ってくれますよね。明るくて、思いやりのある女性です。仕事の相談にも乗ってくれて、すごく、助けてもらってるんです。来春には、結婚したいんです。お母さん、お願いします」沢富は、母親を真剣に見つめた。

一つうなずいた母親は、武史に念を押した。「気持ちはわかったわ。結婚するということは、ひろ子さんを守り、家族を守っていくってことよ。その覚悟は、できてるの」沢富は、背筋を伸ばしはっきりと返事した。「もちろんです。ひろ子さんを死ぬまで守ります。必ず、幸せにします。神に誓います」母親は、少しは大人になったように思えて笑顔を作った。「とにかく、お父様にその気持ちを伝えます。しっかり、自分の将来を考えて、仕事をやることね」なんとなく母親がひろ子さんを気に入ってくれたようでほんの少し安心した。タイミングよく、オマールエビのパスタが運ばれてきた。「お母さん、あごが落ちるくらいおいしいオマールエビです。さあ、お母さん、食べてみてください」

小さく切ったエビの一片をフォークで口に入れると母親は、ニコッと笑顔を作った。「あら、ほんと。おいしいわ。帝国ホテルの味じゃない。大したものだわ。きっと一流ホテルで修業なされたんでしょね」喜んでくれたことにほっとしたひろ子は、返事した。「そうなんです。こちらのシェフは、ヒルトンホテルで修業なされたそうなんです。今、すごく評判が良くて、県外からいらっしゃるお客さんも多いんです。いつも、予約でいっぱいだそうです」母親は、笑顔でうなずいた。「福岡にやってきてよかったわ。空気はきれいだし、おいしい料理もいただけて、最高。武史、福岡で仕事させていただいて、よかったじゃないの。人生は、どこで幸運に巡り合うかわからにわね」

沢富は、今後の予定を確認した。「お母さん、2, 3日は遊んで行かれるんでしょ」母親は、小さく顔を振った。「そうもいかないのよ。法務大臣の奥さんといろいろと話があつてね。明日の午前11時の便で帰る予定。ひろ子さん、とんぼ返りでごめんなさいね。時間が取れたら、対馬にも行ってみたいわ。その時は、よろしくね」ひろ子は、対馬に来てくれるとわかり、何か、うれしくなった。「ぜひ、お越してください。観光名所はいくつかありますから、喜んでご案内いたします。大したおもてなしはできませんが、対馬の活き魚料理を召し上がってください」母親に認められたような気分になり、何かしてあげられることはないかと考えた。

ひろ子は、母親と少しでも一緒の時間を過ごそうと思い、明日、ヒルトンホテルに迎えに行くことにした。「お母さま、明日、お迎えに参ります。何時がよろしいですか？」さすが、タクシーの運転手だけあって、気が利くと思った。「それじゃ、9時をお願いします。空港でショッピングでもして時間をつぶすわ」笑顔でうなずいたひろ子は、即座に返事した。「はい、9時ですね。かしこまりました。出発まで、私も、お付き合いさせていただきます」三人は、エルミタージュを出ると風光明媚な鏡山（かがみやま）に向かった。